体育学研究, 38 : 413-424, 1994.

Mead 理論の検討とそのスポーツ的社会化論への適用可能性 :

「I」は主体性のベースか

山 本 教 人¹⁾

Examination on Meadian theory and its applicability to sport socialization theory :

Is the "I" a base of subjectivity ?

Norihito Yamamoto¹

Abstract

The purpose of this study was to examine Meadian theory and to discuss its applicability to the subjective sport socialization theory.

The study was undertaken in the following procedure.

1) Reviewing the preceding study, it was clarified that the socialization into sport study neglected the subjectivity of socializee. By the way, in the symbolic interactionist's interpretation of Mead, the "me" represented the social aspect of self and the "I" represented the human subjectivity. Thus, according to this interpretation, it was said to be correct that the Meadian "I" played a significant role in the subjective sport socialization theory. At the end of this part, some attempts to apply the Meadian theory to the sport socialization theory were offered concretely.

2) Analysing Mead's eminent work titled "Mind, Self, and Society" in detail, it could understand that Mead bestowed double meanings on the "I", namely, the "I" as a response and the "I" as which responds. As a result of discussing the meaning of former "I", it became clear that it meant a real response which was difficult to know a priori and was expressed through the reflective thinking to conquest the problematic situation. Because on this account, as we were faithful to Mead, it was able to say that the reflective thinking was a base of human subjectivity, but it was not able to say that the "I" as a real response was so.

3) From above reason, it was concluded that the effort of existing subjective sport socialization theory as well as symbolic interactionism which attempted to include human subjectivity in the Meadian "I" as a response would fail inevitably. Finally, it was suggested that the reinterpreted Meadian theory in this study was available to explain human subjectivity in the process of sport socialization.

Key words : sport socialization, subjectivity, symbolic interactionism, "I" and "me"

(Japan J. Phys. Educ., 38 : 413-424, March, 1994.)

キーワード : スポーツ的社会化, 主体性, 象徴的相互作用論, 「I」と「me」

I. は じ め に

これまでスポーツ的社会化研究は, その一側面であるスポーツへの社会化研究を中心に積極的に

推進されてきた. 一連の研究は, 理論的, 実践的に貴重な成果をもたらしたばかりでなく, 研究方法論の飛躍的な進展をもたらした点で, 高く評価されなければならない. しかしながら, 一方ではそれらへの批判もまた絶えたことがない. 中でも, 社会化される側の主体性を理論の中に取り込めて

1) 九州大学健康科学センター
〒816 福岡県春日市春日公園 6 - 1

1. Institute of Health Science, Kyushu University, Kasuga-koen,
Kasuga, Fukuoka (816)

いないという批判は、社会学の根幹に触れる問題であり、先人たちの努力も、突き詰めれば、社会的拘束と個人の主体性の理論的止揚に収斂するといった意味で極めて重要である。

ところで、従来より主体性を語る場合、象徴的相互作用論の考え、特にその Mead 理解は重要であるとされてきた。スポーツ社会学の分野でも、上述の非難を回避するために、スポーツ的社会化論における人間の主体性を Mead 理論の「I」側面で保証しようとする幾つかの試みが顕在化してきている。しかしながら、そうした試みはこれまでのところ必ずしもうまくいっているとはいえないばかりか、必ず挫折する運命にあるとさえいえる。

本研究は、象徴的相互作用論に基礎づけられた「主体的なスポーツ的社会化論」^{注1)}の試みが必然的に挫折することを、Mead の再解釈を通じて明らかにするというどちらかといえば批判的な目的と、再解釈された Mead 理論の主体的なスポーツ的社会化論への新たな適用可能性を検討するという建設的な目的を併せ持っている。この目的のために、以下では、まずスポーツ的社会化研究の理論背景とその問題点について、これまでに明らかにされていることを中心に簡潔にまとめたい。この作業を通じて、主体性の看過というスポーツ的社会化研究の抱える理論的な問題点が浮き彫りにされるだろう。続いて、主体的なスポーツ的社会化論の理論背景と論旨を明確にすると共に、その試みが現在どの程度成功しているのかを具体的に検討したい。その後、Mead が「I」に込めた意味を、彼の代表的な著作であるとされる『精神・自我・社会』^{注2)}を中心に再現したい。そして、再現された Mead の「I」像に忠実であろうとすれば、これまでの主体的なスポーツ的社会化論の試みが必然的に挫折することを幾つかの問題点を指摘することで明らかにし、併せて象徴的相互作用論そのものが主体性を保証する理論としては無効であることを論証したい。即ち、そこでは「I」が主体性のベースだとする従来の見解は却下され、むしろ「I」のベースが主体性であることが主張されるだろう。最後に再解釈された Mead 理

論の主体的なスポーツ的社会化論へ向けての新たな適用可能性が検討されよう。

なお、主体性概念については定義が錯綜しているが、本研究では、それを最大公約数的に「集団あるいは個人の自己確認をふまえた能動性」(濱島ほか¹²⁾)を意味するものとして規定しておきたい。

II. スポーツ的社会化論をめぐる状況

1. スポーツ的社会化研究の理論背景と問題点

スポーツ的社会化研究は、「スポーツ参与」を鍵概念にして「スポーツへの社会化」研究と「スポーツによる社会化」研究の2側面より進められてきた。この内、これまで積極的に成果の蓄積がなされてきたのはスポーツへの社会化研究であるが、その準拠枠としては「社会的学習のアプローチ」や「社会的役割-社会システムのアプローチ」が有効であるとされてきた。例えば、社会的学習のアプローチでは、図1に示すように、多様な「個人的属性」を有する役割学習者は「社会化の状況」の中で「重要な他者」によって影響され、スポーツ的役割へと社会化されると仮定されている。

さて、これまでのスポーツ的社会化研究、中でもスポーツへの社会化研究に対する批判としては、方法論的にはスポーツ的役割学習において社会システムに固有の規範を無視しているといった問題や、社会化する側とされる側の相互作用を考慮していないといった問題、更にはサンプリングの偏りの問題等が指摘されてきた^{1, 13, 19, 28, 30, 33, 34)}。しかしながら、何といたってもこれらの研究に対する批判で重要なのが、社会的学習のアプローチや社会的役割-社会システムのアプローチ

図1 スポーツ社会過程の3要素 (ケニヨン・マックファーソン¹⁶⁾ p. 333)

が、社会化される側の主体性を看過しているとする理論的な側面からの批判^{13, 19, 27, 30, 31, 33)}である。つまり、これらのアプローチでは、受動的にスポーツ的役割を引き受ける人間を捉えることはできても、主体的にスポーツ文化や社会の発展に寄与する人間の姿を捕まえることはできないという批判である。

ところで、象徴的相互作用論やエスノメソドロジー等の、いわゆる意味学派に属する人々は、これまで人間の社会による拘束の側面よりは、むしろ人間による社会構成の側面に重きを置き、構造機能主義のカウンター・パートとしての役割を社会学理論の中で担ってきた。特に、象徴的相互作用論者は Mead 思想の正当な後継者を自認し、Mead 自我論の「I」側面に人間の主体性を読み込んできたが、その影響は、近年スポーツ社会学の分野においても、特に若手の研究者の間で次第に大きなものとなりつつある。従って、次に主体的なスポーツ的社会化論と象徴的相互作用論が共有している Mead 理解について明らかにし、主体的なスポーツ的社会化論の試みが現在どの程度成功しているのかについて検討を加えたい。

2. 主体的なスポーツ的社会化論の理論背景と現状

象徴的相互作用論者^{注3)}にとって、他者の役割や期待を内面化することで形成される Mead 自我論の「me」側面が、「過剰に社会化された人間観」(Wrong³²⁾)を想起させるのに充分なほど保守的色合いを帯びたものであるのに対して、「I」はそのような「me」を変容させ、社会の進歩や改革を導く革命家のイメージで捉えられる。例えば、ブルーマー (Blumer)²⁾は意味の提示過程と解釈過程を Mead の「me」と「I」との相互作用に関連づけ、個人による意味解釈の過程に新奇なものの創発の可能性をみようとしている。また船津⁶⁻⁹⁾は、「me」を解釈し、修正、変更するという積極的な機能を持つものとして「I」を捉え、それが「me」と同様に社会的に形成されるものであると解釈する。そして、「I」故にこそ人間は他者の目を通して自己を対象化し、客観視するこ

図2 象徴的相互作用論者の Mead 理解

とができるのであり、そのことを通じて新たなものを生み出していくことができるとし、このような人間の内的活動を「創発的内省性」(船津⁷⁾ pp. 85-100)と表現している(図2参照)。更に、この創発的内省性としての「I」は、「me」による習慣的な行動が何らかの障害や妨害に直面した場合に活性化されるという。つまり、人が自らの自我の在り方に何の疑問も差し挟まず、他者や社会の期待通りに行動している間は「I」の出る幕はない。ところが氏によれば、現代社会は人間をモノと化し、モノ化された社会関係の中で彼の主体性を放棄させ、自らの自我の在り方に関し疑問を抱かせるような状況を呈している。従って、「I」が物象化された自我に異議を申し立て、「真の自我」^{注4)}(船津⁷⁾ p. 228)を主体的に取り戻す上で決定的に重要な役割を果たすのは、まさにこのような社会状況において他ならず、その現代的意義が積極的に評価されなければならない理由もここにあるということになる。

さて、以上のような Mead 理解、特に船津の立場を主体的なスポーツ的社会化論へ積極的に適用しようと試みている研究者のひとりに吉田を挙げることができる。氏³⁵⁾は、まずスポーツにおける社会化の中心的課題を、社会化における主体の一受け身の論争の止揚にあると捉える。このための基本戦略としては、社会化が自我の認識作用を通じて達成されることから、まず個人の自我構造を解明することが必要であり、更に人と社会の出会いの場を個人がどのように認識するかという、社会化に関わる認識的状况を解明することが必要であるとする。個人の自我構造は、自我には他者

の期待や態度を内面化した「me」と、個人にとって問題を含む「me」を修正、変更し、新たなものを生み出す「I」の二側面があるとする船津のMead理解を引用する形で説明されている。また、社会化に関わる認識的状况に関しても、氏は船津に衣摺しつつ、それがルーティンの状況と問題的状况に大別できるとする。ルーティンの状況とは、人間の行為が一定のパターンに従って遂行される状況であり、人間の主体性はまずは問題とならない。一方問題的状况とは、従来のやり方が通用しなくなる状況であり、ここにおいて問題を有する「me」を乗り越えるための「I」の働きが活性化されるとする。この場合特に重要なのが、「I」は独断的に問題の解決を図ろうとするのではなく、他者や社会との関係を踏まえた上でそうするのだということである。従って、主体性を「交渉性と個性を前提要件とし、自己の置かれた社会的状況に応じて、自律的に適切な行為を顕現していくことを可能とする性能」(吉田³⁵⁾ p. 114)と規定した場合、それは取りも直さず「I」の機能に他ならないことになる。このように、「I」は社会的に形成され、社会関係を考慮しつつ新たなものを生み出すが故に上述の論争の止揚には不可欠であるとされるのである。

更に、以上の「I」理解を軸に、吉田はバーン・アウトの問題や子供の社会化の問題について論じている。例えば、競技者のバーン・アウト(吉田³⁵⁾ pp. 118-119 吉田³⁷⁾ pp. 641-642)は、過去のヒーロー的なスポーツ的自我と、現在のフォロアーとしての自我が断絶し、他者の役割期待と本来の自分、つまり「真の自我」との間に対立、矛盾の生じた状態であると解釈される。つまり、このような状況は「I」が現在の役割に反作用し続けている問題的状况と理解されているが、そうした状況をいかに主体的に克服していくかについては明らかにされてはいない。次に、子供の社会化について³⁶⁾は、子供の望ましい社会化のためには高度化志向の組織的スポーツがよいのか、子供同士で行う未組織的な遊びがよいのかといった観点から論を展開している。そして「I」は問題的状况において活性化され、状況の再構成をするとい

う意味で主体性の基盤であること、また、その「I」自身も問題状況の克服を通じて形成されることから、とかく批判されることの多い組織的スポーツも、問題状況を子供に提示し、子供の主体性、つまり社会化能力を鍛えるといった点では評価できるとしている。

このように、主体性のベースだとされる「I」は、スポーツにまつわる問題状況を解釈する上で一定の斬新な視点を提供していると評価することはできるかもしれない。しかしながら、個人の主体性を保証する社会化論を志向するのであれば、上記のような問題状況の解釈に止まらず、問題状況に直面した個人が、いかにして主体的にそのような状況を克服していくのかが「I」概念を中心に説明されなければならないだろう。ごく限られた例から結論を導き出すのは早計に過ぎるかもしれないが、以上の理由により、主体的なスポーツ的社会化論は、これまでのところ人間の主体性について十分に説明できてはいないと判断される。このことの原因については、Mead理論をMeadに忠実に再現した後に検討することとしたい。

Ⅲ. Mead 再 訪

1. 「I」の意味

今日、Mead をめぐっては議論が錯綜しており、彼の自我論の「I」側面だけを取ってみても、その解釈は解釈者の数ほど多様であるといっても過言ではない。そうした多様な「I」解釈を、機能的意味から「救済としての『I』」解釈と「残余としての『I』」解釈とに二分して整理したのはLewis¹⁷⁾であった。救済としての「I」論者は、「I」を社会化されない動物の衝動と捉えることにより、「me」による社会決定論が回避できると考える。一方、残余としての「I」論者は、Mead 理論は「I」への言及さえなければより説得力のあるものとなっていたらろうとし、Mead を決定論的に理解することで「I」は根本的に不必要なものだと考える。更にLewisによれば、シカゴ学派とアイオワ学派という象徴的相互作用論の二大潮流も、このような「I」解釈をもとに区別が可能であるという(Lewis¹⁷⁾ pp. 273-274)。

つまり, Mead の正当な後継者を自認するブルーマー率いるシカゴ学派にとって, 「I」は人間を社会決定論から「救済」するための鍵概念であり, ブルーマーの仕事は「体のよいジャーナリズム」(Couch et al.³⁾) と論難する Kuhn 率いるアイオワ学派にとっては, 経験的検証に耐え得ないような概念は不要であり, 「I」は Mead 理論の「残余」として片付けられる。

表1 「精神・自我・社会」における Mead による「I」の用法

(原本, 邦訳)

○ 1. 「I」は, …自我に対して反応を示す. (p. 174, 186頁)	
○ 2. …「me」に対して我々は「I」として感応する. (p. 174, 186頁)	
○ 3. だれも, …「I」の直接の反応をつかむことはできない. (p. 174, 187頁)	
○ 4. 「I」とは, 我々が自分自身と同一視しているものだ. (pp. 174-175, 187頁)	
● 5. 「I」とは, 他者の態度に対する有機体の反応であり, … (p. 175, 187頁)	
○ 6. …人はその「me」に対して「I」として反応を示す. (p. 175, 187頁)	
○ 7. …「I」としての人間が反応していく… (p. 175, 187-188頁)	
● 8. …状況への反応は不確定的で, それ〔反応〕が「I」を構成する. (p. 175, 188頁)	
● 9. 「I」は, …彼の動作で, … (p. 175, 188頁)	
● 10. 彼の反応が「I」である. (p. 176, 188頁)	
○ 11. この「I」の反応が… (p. 176, 188頁)	
● 12. この状況への反応としての「I」は, …不確定的である. (p. 176, 188頁)	
○ 13. 未来への運動は, いわばエゴの, つまり「I」の歩みである. (p. 177, 189頁)	
○ 14. 「I」の行為は, … (p. 177, 190頁)	
○ 15. 「I」とは, …社会的状況に反応しているような何かである. (p. 177, 190頁)	
● 16. …態度に対して, その人が応じてする回答こそ「I」である. (p. 177, 190頁)	自
● 17. 「I」という形での反応がなければ, 「me」がないことになる. (p. 182, 194頁)	
○ 18. 「me」は, 「I」の反応を通して…所有者のコントロールを受けるから, … (p. 183, 195頁)	我
○ 19. …個人が「I」として反応していく… (p. 186, 199頁)	
● 20. 「I」とは, …共同体の態度に対するその個人の反応である. (p. 196, 209頁)	
● 21. …社会状況への…新しい応答が, …「I」を構成する. (p. 197, 211頁)	
● 22. …「me」…への個人の反作用こそが, …「I」を表示している. (pp. 198-199, 212頁)	
○ 23. …エゴもしくは「I」の反応が, … (p. 199, 212頁)	
○ 24. …変化は, 単に「me」のだけでなく「I」のものでもある反作用を通して… (p. 202, 216頁)	
○ 25. …エゴ, または「I」は, それの反作用が起こった後に… (p. 203, 216頁)	
○ 26. 爆笑とは, いわば「I」による…反応の仕方である. (p. 206, 220頁)	
○ 27. 個人が「I」として自分自身の反応を持ち込んでいく. (p. 211, 224頁)	
○ 28. …計算通りにはいかない「I」の行動に… (p. 214, 228頁)	
○ 29. …「me」に反作用する「I」が… (p. 214, 228頁)	
○ 30. 「I」の反応は適応を含んでいるが, … (p. 214, 228頁)	
○ 31. 個人, それも「I」のこういう反作用, その「I」が住んでいる状況に対する反作用こそが, 重要な社会的変化を引き起こす. (p. 217, 230頁)	
○ 32. 「I」の反応は, 社会状態の弛緩を含んだ過程かもしれないし, … (p. 218, 231頁)	
○ 33. …「I」の持つ衝動が… (p. 274, 289頁)	
○ 34. …自我とは, …「I」の行動である. (p. 277, 292頁)	
○ 35. …「me」は「I」が反応する状況を設定する. (p. 277, 292頁)	
● 36. …「I」はその状況に対する実際の反応である. (p. 277, 292頁)	社
● 37. 我々が実際に行っている事柄, 話している言葉, 我々の表情, 我々の情動, これらが「I」である. (p. 279, 293-294頁)	会
● 38. …「I」とよんできた動作そのものは… (p. 279, 294頁)	
○ 39. 「I」の反応は, これらのすべての傾向を結び付けるものだろう. (p. 281, 295頁)	
● 40. 彼の反応, つまり「I」は, … (p. 335, 347頁)	

注) ●: 反応としての「I」 ○: 反応するものとしての「I」

ところで、上述のような機能的な意味を付与される「I」を、Mead 自身はどのように表現しているのでしょうか。表1には、『精神・自我・社会』でMeadが「I」に言及している箇所の全てを抜粋して示してある。表中○印をつけた文章に注目してみると、それらは何れも「I」が反応するものであること、つまり反応主体と「I」とが同義であることを示している。従って、Mead によるこのような「I」の用法を、本研究では「反応するものとしての『I』」と表現することとする。一方、表中●印をつけた文章は何れも「I」が反応そのものであることを意味しているため、本研究ではこれを「反応としての『I』」と表現する。『精神・自我・社会』においては、反応としての「I」よりは反応するものとしての「I」への言及が数の上では上回っている(前者の35%に対し、後者の65%)が、後者の意味については必ずしも明らかではない^{注5)}。従ってこれ以降は、Mead 自身が反応としての「I」に込めた意味を詳細に検討し、従来の「I」解釈の誤りについて明らかにしていきたい。なお、反応するものとしての「I」の意味と主体性との関わりについては、最後に結論のみ要約することとする。

2. 反応としての「I」

「『I』とは、他者の態度に対する有機体の反応であり、『me』とは、有機体自身が想定している他者の態度の組織化されたセットである」(Mead²¹⁾ p. 175 邦訳 p. 187) と Mead 自身明言しているように、「I」は「me」に対する有機体の実際の反応を意味する。更に、この反応である「I」は不確定で、他者によっても反応の主体である有機体自身によっても事前には把握できないようなものであると Mead はいう (Mead²¹⁾ pp. 173-178 邦訳 pp. 186-191)。以上のことを、Mead がよく引き合いに出す野球を例に取って説明してみよう。野球というゲームに参加している三塁手にとって、自分の前に転がってきたボールを捕球し、一塁へ送球することは自明のことであるが、これが彼のチームが彼に要求する事柄であり、そのような要求が三塁手の「me」を構成している。三

塁手は、このチームの要求する所に従って一塁への送球を試みる。この送球という彼の実際の反応が「I」である。さて、いくら訓練されたプレーヤーといえど、この実際の反応を完全に意のままにできるということは望めないだろう。なぜなら、予期せぬ妨害や指の滑り等によって「結果としての動作は、彼が望んで予想した動作からはいつでも少しずれている」(Mead²¹⁾ p. 177 邦訳 p. 189) からである。しかし、Lewis が「『I』は『me』によって意味されるものに対して人間性、或いは自由の観点を持ち込む」(Lewis¹⁷⁾ p. 265) とその意義を高く評価したように、この反応の結果が事前に予測できないということには、ある重要な意味が含まれている。つまり、予測できない反応である「I」は、結果的にそれまでの慣習的な「me」を変更し、新しい状況をもたらす可能性を含んでいるからである。このような「I」の積極的機能を理解して初めて、Mead が「『I』は自由とか自発性とかの観念をもたらす」(Mead²¹⁾ p. 177 邦訳 p. 191) といい、「未来への運動は、…『I』の歩みである」(Mead²¹⁾ p. 177 邦訳 p. 189) といっていることの意味が理解できるものと思われる。

ところで、以上のような反応である「I」が生じる状況とはどのようなものなのであろうか。このことを考える上で、Mead による問題状況に関する考察は重要である。問題状況とは、Mead によれば、「個人と彼の世界との間の適応の欠如した状態」(Mead²²⁾ p. 6) である。人間は環境との適応を回復させるために、「…存在するものとしての対象から、彼の現在の態度における個人の性質に反応するようなものを選び取る」(Mead²²⁾ p. 7) が、それは人間の有する知能、つまり「本質的に、過去の経験に基礎を持つ未来の可能な結果との関連で、現在の行動の諸問題を解決する能力」(Mead²¹⁾ p. 100 邦訳 p. 108) に依存している。重要なのは、このような能力は有機体が反応を抑制し、彼自身を他者の見地から反省的に眺めることが可能な場合にのみ保証される(Mead²¹⁾ pp. 90-100 邦訳 pp. 99-109) ということである。さて、Mead が「人間の知能は、…ある問題を含む環境状況の中で可能ないくつかの択一的な反応の中から

ら、そのひとつを慎重に選択する。そして、その選ばれる反応が複雑な場合、…知能は、…単純反応の組み合わせ或いは連鎖を、与えられた環境上の問題の最も適切で調和の取れた解決を個人に可能とするように組織化することができる」(Mead²¹⁾ p. 98 邦訳 pp. 106-107) という時、また「…社会状況への…新しい応答が、『me』に対応するものとしての『I』を構成する」(Mead²¹⁾ p. 197 邦訳 p. 211) という時、問題状況を克服するために知能の働き、即ち反省的思考を経て外存化された反応こそ「I」に他ならないことになる。また、反応である「I」が予測できないということの意味も、無意識的、無反省的な行為の流れが遮断された問題状況において最もよく理解できる。なぜなら、反応主体による反応の予測が最も困難になるのは、これまでの習慣的なやり方が通用しなくなり、望ましい反応がどのようなものであるかを確定できないような状況においてであると考えられるからである。

最後に「I」と「me」との関係について Mead は次のように述べている。「…記憶の中の『I』が、一秒、一分、もしくは一日前の自我のスポークスマンになる。所与としては『me』しかない。しかしその『me』は、以前には『I』だった『me』である。」(Mead²¹⁾ p. 174 邦訳 p. 187) と。即ち、「我々は、…直接の反応はつかめない」(Mead²¹⁾ p. 174 邦訳 p. 187) のであり、それ故に「…我々が自分の本質を決して充分には知らず、自分自身の行為に自分で驚いてしまう」(Mead²¹⁾ p. 174 邦訳 p. 186) ということが可能なのである。

IV. 主体性の行方

1. Mead 解釈の誤謬

既に明らかにしたように、「I」概念でスポーツ的社會化論における人間の主体性を保証しようとする試みは、これまでのところ必ずしも成功しているとはいえなかった。このことの原因として、ここでは3つの主要な問題点を指摘しておきたい。何れの問題も Mead 理論の読み誤りに起因するものであるため、この作業は結果として、主体的なスポーツ的社會化論を基礎づけている象徴的

相互作用論を無効にするものでもある。

さて、吉田は個人の主体性を独我論から救済するための方策として、「I」に「me」と同様の社会的基礎づけを与えている(吉田³⁵⁾ pp. 108-110 吉田³⁶⁾ pp. 4-5)。「I」をそのように理解することは、結果的に「I」と「me」との身分的な差異を不明瞭にしてしまうのだが、両概念の違いについては十分に納得できるような説明がなされてはいない。このことを第1の問題点として指摘しておきたい。つまり、「I」が「me」と同様に社会的なものであるのなら、殊更にふたつの概念を用いる必要性はなくなってくるように思われ、しかも、「I」にだけ主体性を保証するものとしての特別な地位を与えた理由が不鮮明になってくるように思われるのである。このことに関し、「但し主我(『I』)^{注6)}は、個性などの基盤でもあるため、完全には社會化され得ないものと言える」(吉田³⁵⁾ p. 110) との主張は、両概念の違いを明らかにするものでないばかりか、いたずらに理解を混乱させるだけであり有害でさえある。

第2に、第1の問題点と少なからず関連があるのだが、「I」には人間の主体性を表し、新たなものを生み出す創造者であるとの積極的な身分が与えられている反面、「me」には他者への同調性を表し、保守的、現状維持的であるという消極的な性格が付与されているに過ぎないことに関わる問題が指摘できる。つまり「me」は多くの場合、問題状況との関連においてのみ取り上げられ、しかも、常に「I」によって修正されるべきものとして捉えられているが、このような二分法は、先の「I」は社會性を有するとする主張と明らかに矛盾するものであり、そのような主張を空文化してしまう。なぜなら、「I」が他者や社会との関係を考慮しつつ主体的に問題の解決を図るのであれば、まずもって強調されるべきは、そのような「I」を可能とする社會性、即ち「me」でなければならないはずだからだ。更にこのことに関連し、主体性問題を論じることは、我々が十分に社會化されて初めて可能となるのだという事実に思いを馳せれば、人間の社會性はいくら強調してもし過ぎることはないと言ええる。

最後に、「I」概念に関わる最も重要な問題点を指摘しておこう。つまり「I」を主体性のベースとして理解することは、主体的なスポーツ的社会化論の基本的前提であるのだが、主体性の説明変数である「I」については、その機能が繰り返し強調されるだけで、それ自体が一体何を意味しているのかが全く不明だということである。このため、「I」が主体性のベースであるとする主張はアプリアリに正しいという他ないが、その正しさは何物によっても証明され得ないことになってしまう。つまり、個人はいかにして主体的に問題状況の克服を図ることが可能なのかという問いに対しては、「I」の働きが活性化されるからであるとの回答以上のことは引き出し得ないのである。スポーツ的社会化過程において個人の主体性を経験的に検証することは、その必要性がいかに強調されようとも、「I」概念とその操作可能性の検討なしには不可能であろう。

さて、ここで再度「I」の身分について確認しておけば、「I」とは問題状況に直面した人間が、そうした状況の克服を図るために反省的思考を通じて外化させる、事前には把握できない実際の反応であった。従って、反応である「I」が、反応

主体の意図とは独立に新しい状況の出現を可能にすることを否定はできない。また、一部の象徴的相互作用論者が、Mead 理論の中で「I」に突出した地位を与えた理由もこの限りでは理解できる。だが、実際の反応である「I」自体は、人間が主体的であることの証しに過ぎないといった意味で主体性のベースであるとはいえず、むしろ、その反応を可能とする反省的思考こそが主体性のベース、或いはそれを保証するものだといえる。以上のことを Mead に忠実にしかも簡潔に表現すれば、「I」は主体性のベースではなく、「I」のベースが主体性だということになる。従って、象徴的相互作用論の立場は Mead を完全に読み誤ったものであり、反応である「I」に人間の主体性を読み込もうとするいかなる試みも、少なくとも Mead に忠実である限り必然的に挫折すると結論される。

2. 新たな可能性

図3には、本研究の Mead 理解が、「I」概念、「me」概念を中心にして二者関係で示されている。本研究に残された最後の課題である Mead 理論の主体的なスポーツ的社会化論への適用可能性

図3 Mead における主体性と反応の二者関係モデル

については、図の意味についての説明を加えた後に検討したい。

Meadにとって、「me」とは個人にとっての行為の台本を提供するものであり、具体的な他者から抽象度において様々な「一般化された他者」(Mead²¹⁾ p. 154 邦訳 p. 166) の態度を取得することで獲得されるものである (Mead²¹⁾ pp. 152-200 邦訳 pp. 164-213)。従ってそれは、一個人においては図に示すような同心円的な広がりをもって発達していくとイメージできる。故に、様々な他者や社会的世界に基礎づけられた様々な「me」が、行為の台本として個人に内在していると仮定することができよう。このような「me's」が抽象度の高いレベルで統合されたものが、個人の自我であると考えられる。さて、Meadにおいては、人間の主体性は問題状況において初めて重要な意味を担ってくるものであり^{注7)}、そうした状況の克服を可能とする人間に固有の知能、即ち、自分自身を他者の見地から眺めることができるという能力によって保証されるものであった。ところで、こうした能力は、個人が自らに内在している様々な他者の目(「me's」)を通して自分自身を振り返ることができるということと平行であるため、主体性のベースと呼べるのは、自我と「me」、或いは「me」と「me」との相互作用に他ならないことになる。このような相互作用を経て外存化される実際の反応が「I」である。この「I」は、それがどういった結果をもたらすのかは反応主体にさえ予測が困難であるが、問題状況との関わりにおいて、「有意味な反応」と「無意味な反応」とに区別が可能である。無意味な反応とは、問題解決に益しないような反応であり、個人にとって意味をなさないまま忘れられる。一方有意味な反応には、問題の解決を可能とする反応と、問題の解決には役立たないが、その結果が個人にその後の行為の台本を提供するような反応とが含まれる。問題状況の克服が可能な反応は、その意義が当該状況に関与している人々によって評価され、「me」として彼らの自我の一部に組み入れられる。新たな「me」は、その後、個人の行為を導く台本として機能することになる。一方、問題解決が

不可能な反応は、結果が反応主体にフィードバックされ、新たな内省活動を刺激する一方で、問題状況に関与している諸個人の内省活動をも刺激するだろう。このような循環の中で、問題状況の克服には役立たないが、個人にとって有益だと評価された反応は「me」として登録され、その後の個人の行為を導いていく手本となる。

さて、最後に最も基本的な二者関係である親子関係を例に取り、いかにして個人がスポーツへの社会化過程に主体的に関わりあっていくのかについて考察を加え、主体的なスポーツ的社会化論への Mead 理論の新たな適用可能性を検討することとしよう。ところで、スポーツへの社会化過程とは、スポーツに関連のある役割の取得過程と同義であるため、その過程で社会化される個人に関与してくる他者とは、極めて単純化していえば、そのような役割取得を促進するか、あるいは阻害する存在であろう。子供のスポーツ的役割取得に親が促進的に関与する場合、親の期待(「me」)と子供の指向性に矛盾はなく、子供は親の与える情報を直接的に内面化するだろう。つまりそのような状況では、社会化をめぐる親子間に問題は存在せず、子供の主体性もまずは問題とならない。しかし、子供があるスポーツを行うことに対して親が勉学との両立不可能性を盾に反対する場面が容易に想定できるように、日常の親子関係は大なり小なり問題を含んでいると考える方が現実的である。このような状況は、社会化をめぐる親子間の問題状況として捉えられるが、その克服に向けて両者はお互いに内面化した「me」を頼りに内省活動を活発にし、ある反応(「I」)を外存化していく。つまり、子供は同じような親子間の問題をうまく解決した友人や、健康のためにはスポーツ活動は欠かせないとする体育教師等をモデルに親への反応を決定していく。一方親は、ある子供を例に取って、スポーツをしている子供は一般に学業成績が思わしくないと述べたり、スポーツが健康によいというのは幻想だとするある生理学者の意見を引き合いに出し、子供の反応に否定的な反応を試みるだろう。このようなやり取りの中で、親は子供の自己主張の中にその子の成長を認識す

るかもしれない。或いは、子供は親の反応の中に自分に対する期待の大きさを感じるであろう。これらの情報は当該問題の解決には無力だが、その後の親子関係を決定づける重要な情報として蓄積されるであろう。さて、子供は数週間にわたる親との交渉の果てに、週に2回は学習塾にいくという条件を付与されてスポーツへの関わりを認められたとしよう。こうした問題解決の方法は、当該問題状況を克服したという意味で重要であるばかりでなく、その後の親子関係を方向づけるものとしても重要である。つまり、親子間に同じような問題が生じた場合、その解決には、いち早くお互いの譲歩という戦略が用いられる可能性が高くなると考えられるからである。

これまでのスポーツへの社会化研究では、重要な他者の影響が社会化される側にどのように受け入れられるのかについては理論的な探求が不可能であった。そして、このことがスポーツへの社会化研究が個人の主体性を看過しているとして批判される原因でもあった。これに対して本研究が明らかにした枠組みは、これまでブラックボックスとされてきた所に直接的な光をあてるものであり、社会化する側とされる側の織り成す問題状況の克服に、個人がいかんして主体的に関与していくかを理論的に考察することを可能にした点で重要であるといえる。しかも、主体性のベースである内省活動は、社会的な「me」の存在なしには不可能であるということを経験することによって、陥りがちな独我論を回避しようとする。つまりそれは、人間の主体性は人間が社会的な存在であることによって初めて保証されるのだということを強調する点で、極めて社会学的な枠組みなのである。このような枠組みに基づけば、社会化過程とは、単に役割取得をめぐる諸個人間の影響のやり取りの過程としてではなく、主体的な諸個人の、社会性を基底とする内省活動とそれに基づく反応の交錯する過程として捉えられるであろう。またこのことは、例えばこれまで単に社会化の失敗として片付けられていた現象が、他の役割への積極的移行であると評価し直される等、従来、少なくともスポーツの社会化に関連のある問題としては話

題に上らなかったような多くの現象の理解に、ドラスティックな変更を迫るであろう。

V. お わ り に

本研究では、順次以下のことを明らかにしたきた。即ち、スポーツの社会化研究、中でもスポーツへの社会化研究は、人間の主体性を理論の中に取り込めていないという点で数多くの批判に晒されてきた。このような批判を回避するために、近年、象徴的相互作用論に基礎づけられた主体的なスポーツの社会化論の試みが顕在化してきている。しかしながら、そのような試みは現在までのところ必ずしも理論的に成功を収めているとはいえなかった。このことは一般理論のスポーツ現象への適用の問題という以上に、象徴的相互作用論に理論的な基礎づけを与えたと評価されている Mead 理論の解釈の問題であった。即ち、Mead のテキストに忠実に Mead 思想を解釈するなら、「I」は主体性のベースであるというこれまでの読みは不可能であり、主体的なスポーツの社会化論の試みは勿論、象徴的相互作用論の Mead 理解そのものが誤りであるといえた。最後に、再解釈された Mead 理論が社会化過程における人間の主体性を説明するのに有効であることが、やや理念的な形ながら示された。

ところで、本研究では「I」のもうひとつの意味、即ち反応するものとしての「I」については敢えて言及を避けてきた。このことの理由のひとつは、既に述べたように、『精神・自我・社会』ではその意味について必ずしも十分な説明がなされてはいないからであった。しかしながら、もうひとつのより重要な理由は、Mead においては、反応するものとしての「『I』(反応の主体)^{注6)}は、意識経験の表象ではなく、その前提要件」(Mead²³⁾ p. 142) であり、従ってその「『I』は、直接的経験の域を越えてたところに存在する」(Mead²³⁾ p. 140) と捉えられており、このような「I」、即ち主体を経験的分析の対象とすることがそもそも不可能だからである。つまり、反応するものとしての「I」概念をもとにした人間主体性の経験的分析の可能性は、初めから閉ざされてしまっ

いるのである。

最後に、Mead の思想は「I」と「me」の議論に尽きるものではなく、スポーツ社会学者によって検討されるに値する数多くの貴重なパースペクティブを含み込んでいる。本研究では、そのような多様な可能性のごく一部が明らかにされたに過ぎない。残された可能性の検討と、ここで示された新たなMead理解が現実との対話においてどの程度有効なのかの検証は、今後の研究に残された課題としておきたい。

付記：本研究は、日本体育学会第42回大会（富山大学）において発表した内容に、大幅な加筆・修正を加えたものである。

注

注 1) 人間の主体性を取り込んだスポーツ的社会化論を、本研究ではこのように表現することにしたい。

注 2) 論旨をより明確にするための、他の文献からの引用や訳語の変更は自由に行った。

注 3) 象徴的相互作用論にも様々な立場のものが存在するが、主体的なスポーツ的社会化論を基礎づけているのは、後に検討する船津やブルーマーの考え方であり、本研究が批判の俎上に載せるのも彼らのMead 解釈だと理解されたい。

注 4) 船津の論述には、曖昧な表現や論理の非一貫性が数多く見受けられるが、これなどはその好例である。つまり、船津が再三にわたって強調しているように、自我が社会や他者との相互作用を通じて形成されるものであるのなら、存在するのはただ単にその人の自我であるはずであり、それに真も偽もないはずである。

注 5) 象徴的相互作用論者は勿論のこと、ごく僅かな例外^{11,17)}を除き、これまでこうした「I」の二側面について言及した研究は殆どない。なお、「反応するものとしての「I」」の意味については、文献23)が参考になる。

注 6) 括弧内著者。

注 7) 無問題状況における人間の行為は、反省的思考に媒介されないといった意味で主体性の介在する余地はない。従って、そのような状況におけるMeadの人間イメージは、「過剰に社会化された人間観」に極めて近い。

文献 (References)

- 1) Allison, M. (1982) Sport, culture and socialization. *International Review of Sport Sociology* 17: 11-37.
- 2) ブルーマー：後藤将之訳(1991)シンボリック相互作用論 —パースペクティブと方法—。勁草書房：東京。〈Blumer, H. (1969) *Symbolic interactionism: perspective and method*. Prentice-Hall: New Jersey.〉
- 3) Couch, C. J., Saxton, S. L., and Katovich, M. A. (Eds.) (1986) *Studies in symbolic interaction*. JAI Press: Greenwich, Connecticut, p. xiii.
- 4) 海老原修(1991)スポーツ社会化における成果と課題。体育・スポーツ社会学研究 10: 153-171.
- 5) Fishwick, L. and Greendorfer, S. (1987) Socialization revisited: a critique of the sport-related research. *Quest* 39: 1-8.
- 6) 船津 衛(1976)シンボリック相互作用論。恒星社厚生閣：東京。
- 7) 船津 衛(1983)自我の社会理論。恒星社厚生閣：東京。
- 8) 船津 衛(1986)自我の社会性 (G・H・ミード)。作田啓一・井上 俊編 命題コレクション社会学。筑摩書房：東京, pp. 5-11.
- 9) 船津 衛(1989)ミード自我論の研究。恒星社厚生閣：東京。
- 10) ゴフ：河村 望訳(1982)マルクスとミード —知識社会学への寄与—。御茶の水書房：東京。〈Goff, T. W. (1980) *Marx and Mead: contributions to sociology of knowledge*. Poutledge & Kegan Paul: London.〉
- 11) 後藤将之(1987)ジョージ・ハーバート・ミード。弘文堂：東京。
- 12) 濱島 朗・竹内郁郎・石川晃弘編(1982)社会学小辞典(増補版)。有斐閣：東京。p. 187.
- 13) 原田宗彦(1991)ソシアリゼーション。体育の科学 41: 508-514.
- 14) 片桐雅隆編(1989)意味と日常世界 —シンボリック・インタラクショニズムの社会学—。世界思想社：東京。
- 15) ケニヨン：日下裕弘訳(1988)スポーツとのかかわり合い —概念構築のための試論とその結果—。糸野豊編訳 スポーツと文化・社会。ベースボール・マガジン社：東京, pp. 57-66. 〈Kenyon, G. S. (1981) *Sport involvement: a conceptual go and some consequences thereof*. In: Loy, J. W., Kenyon, G. S., and McPherson, B. D. (Eds.) *Sport, culture and society* (2nd Revised ed.). Lea & Febiger: Philadelphia, pp. 33-40.〉

- 16) ケニヨン・マックファーソン：山本教人・中塚義実訳(1988)身体活動やスポーツにかかわり合うようになること—社会化の過程—。糸野 豊編訳 スポーツと文化・社会。ベースボール・マガジン社：東京，pp. 331-361. (Kenyon, G. S. and McPherson, B. D. (1981) Becoming involved in physical activity and sport : a process of socialization. In : Loy, J. W., Kenyon, G. S., and McPherson, B. D. (Eds.). Sport, culture and society (2nd Revised ed.) Lea & Febiger : Philadelphia, pp. 217-237.)
- 17) Lewis, J. D. (1979) A social behaviorist interpretation of the Meadian "I". *American Journal of Sociology* 85 : 261-287.
- 18) リンドスミス・ストラウス・デンジン：船津 衛訳(1981)社会心理学—シンボリック相互作用論の展開—。恒星社厚生閣：東京。(Lindesmith, A. R., Strauss, A. L., and Denzin, N. K. (1978) Social psychology (5th ed.). Holt, Rinehart and Winston : New York.)
- 19) McPherson, B. D. (1986) Socialization theory and research : toward a "new wave" of scholarly inquiry in a sport context. In : Rees, C. R. and Miracle, A. W. (Eds.) Sport and social theory. Human Kinetics : Champaign, IL. pp. 111-134.
- 20) McPherson, B. D., Curtice, J. E., and Loy, J. W. (1989) The social significance of sport : an introduction to the sociology of sport. Human Kinetics : Champaign, IL. pp. 37-63.
- 21) ミード：稲葉三千男ほか訳(1973)精神・自我・社会。青木書店：東京。(Mead, G. H. (1934) Mind, self, and society : from the standpoint of a social behaviorist (Edited and with an introduction by Morris, C. W.). The University of Chicago Press : Chicago.)
- 22) Mead, G. H. (1938) The philosophy of the act (Edited and with an introduction by Morris, C. W.). The University of Chicago Press : Chicago.
- 23) Mead, G. H. (1964) Selected writings (Edited with an introduction by Reck, A. J.). The University of Chicago Press : Chicago.
- 24) Mead, G. H. (1982) The individual and the social self (Edited with an introduction by Miller, D. L.). The University of Chicago Press : Chicago.
- 25) Morris, C. W. (1934) Introduction. In : Morris, C. W. (Edited and with an introduction) Mind, self, and society : from the standpoint of a social behaviorist. The University of Chicago Press : Chicago. pp. ix-xiv.
- 26) ナタンソン：長田攻一・川越次郎訳(1983)G・H・ミードの動的社会理論。新泉社：東京。(Natanson, M. (1973) The social dynamics of George H. Mead. Public Affairs Press : Washington)
- 27) 岡田 猛・山本教人(1984)スポーツと社会化論に関する一考察—Social Agent と Socializee の相互作用の観点から—。体育・スポーツ社会学研究 3 : 79-95.
- 28) 三本松正敏(1981)スポーツ社会学における“社会化”研究の展望と課題。福岡教育大学紀要 31(5) : 139-149.
- 29) Shalin, D. N. (1989) Mead, behaviorism and indeterminacy. *Symbolic Interaction* 12 : 37-41.
- 30) 体育社会学会編(1984)スポーツ参与の社会学。道和書院：東京。
- 31) Theberge, N. (1984) On the need for more adequate theory of sport participation. *Sociology of Sport Journal* 1 : 26-35.
- 32) Wrong, D. H. (1961) The oversocialized conception of man in modern sociology. *American Sociological Review* 26 : 183-193.
- 33) 山口泰雄・池田 勝(1987)スポーツの社会化。体育の科学 37 : 142-148.
- 34) 山本清洋(1987)子どもスポーツに関する社会化研究の現状と課題。体育・スポーツ社会学研究 6 : 27-49.
- 35) 吉田 毅(1990)スポーツの社会化における「主体的—受身的論争」の検討—主体的自我論を基底として—。体育・スポーツ社会学研究 9 : 103-122.
- 36) 吉田 毅(1991)子どもにおけるスポーツの社会化に関する一考察—子どもの社会化能力の形成過程からみた組織的スポーツの検討—。山陰体育学研究 6 : 1-11.
- 37) 吉田 毅・松尾哲矢(1992)スポーツ選手のバーンアウトに関する社会学的研究—社会学的概念規定への試み—。体育の科学 42 : 640-643.
- 38) 吉田 毅(1992)スポーツ社会学における社会化論への一視角：主体性をめぐって。体育学研究 37 : 255-267.

(平成4年12月14日受付)
(平成5年9月25日受理)